

D・ボンヘッファーにおける〈世〉の理解

——『服従』第Ⅱ部を中心に——

橋本 祐樹

はじめに

ボンヘッファー研究草創期から論議が積み重ねられてきた『服従』（1937）の〈世〉理解の問題⁽¹⁾は、今日に至り、ある一致点を見出している。すなわち、『服従』に展開される〈世〉の理解は全体的に主としてネガティブであり、ネガティブな理解であるがゆえにこそ当時の現実（世）に対する志向性・政治性を含んでいるという見解である。つまり、ネガティブな〈世〉理解を『服従』において強調したボンヘッファーは、現実の世に対して決してネガティブではなかったというのである。

多くの研究者が一致して提示するこの見解は、『服従』の〈世〉理解にして確かに妥当する。しかし、このようなネガティブな世理解という『服従』の〈世〉解釈の下その政治性を明らかにしてきたこれまでの研究において、果たして『服従』に展開される〈世〉概念そのものが十分に明らかにされ得ているかは疑問が残ると言わねばならない。かつての研究状況においてボンヘッファーの政治性（評価）の問題⁽²⁾が喫緊

- (1) 『服従』の世をめぐる理解は、『服従』出版当初から近年に至るまで議論の対象であったと言える。『服従』の講義を受講した学生ないし『服従』を読んだ信徒はその内容に深く魅了されたといひ、『服従』を出版したクリスチャン・カイザー社の当時の編集長オットー・ザロモンも『服従』初見の際、「バルトの『ローマ書』以来まれに見る文書だと感じて興奮を禁じえなかった」と述べるが、しかし同時にその当初から「個人主義的敬虔への傾斜」（つまりキリスト者と世の乖離）、「律法と福音の混同」との批判も少なくなかった。戦後の H. ミュラーの研究以降は『服従』はいよいよ議論の対象となる。ミュラーは『服従』について、現実の世に対する参与を問わない「教会倫理」の展開に過ぎないと断じた。その理解を現実（世）からの逃避、「誤った道」として否定的に評価したのである。そして、このミュラーによる『服従』の評価を批判的土台とし、『服従』の持つ当時の現実の世への応答性、ないしはその政治性を弁証する研究が続けて提出されていくことになる。最初期にはベートゲ、続いてペーターズ、シュトゥルンク、日本の研究者で言えば、宮田光雄、山崎和明らがいる。E. ベートゲ/R. ベートゲ著、宮田光雄/山崎和明訳『ディートリヒ・ボンヘッファー』新教出版社（1992）、98頁。H. Müller, *Von der Kirche zur Welt: Ein Beitrag zu der Beziehung des Wortes Gottes auf die societas in Dietrich Bonhoeffers theologischer Entwicklung*. Hamburg: Herbert Reich Evg. Verlag, 1961. pp 20, 37, 38, 197, 198, 199. 森平太「解説」『キリストに従う』、新教出版社（1966）、369頁。H. Willmer, *Costly discipleship*, John W. de Gruchy ed., *The Cambridge Companion to Dietrich Bonhoeffer*, Cambridge: Cambridge University Press, 1999. p. 173.
- (2) 当時、ミュラーのように『服従』に触れた多くの者が『服従』に対して批判的な問いを懐いたことは想像に難くない。ボンヘッファー神学の受容を広くひらいたのは〈世〉に対する積極的な理解と関わりを示す後期ボンヘッファーであった。例えば後期に属する『倫理』においては「この世に対する責任」（E 343）が積極的に語られる。『倫理』においては、キリストの支配の意味——教会の目標は「世の秩序を神化することや教会化することではなく、真のこの世性へとそれを解放すること」（E 350）であるとされ、具体的な倫理課題が論じられる。これを見て中期ボンヘッファーの『服従』の〈世〉をめぐる理解を見るならば、それは一見あまりに矮小に映る。〈世〉は神と「相反するもの」（DBW 4 169、一八九）であり、「教会と世の間の分離は遂行された」（184、二〇九）という

D・ボンヘッファーにおける〈世〉の理解（橋本）

の課題であったがため概念研究が二次的なものとされたから、あるいはこれまでの研究がボンヘッファーの主要テーマないしは彼のたまかな像を探ることを中心課題としていた時期であったから——など、諸々の理由が考えられるが、〈世〉の概念研究に関して言えば、「ネガティヴ」と総称されるに過ぎないものに留まったと言わざるをえないのである。私見によれば、これまでのネガティヴな世という解釈に留まっては『服従』の〈世〉理解は汲みつくし得ず、その概念の広がりを見出され得ない。

これまでの研究における到達点から、『服従』の〈世〉概念の新たな次元を批判的に追究すること、これが本稿の課題なのである。ボンヘッファー研究においてはボンヘッファーの実践の歩みと共にその思想を理解すること、ないし彼の思想と共に実践的歩みの意味を探求することが方法の常套である——例えばボンヘッファーの〈世〉理解の意味についても、当時のコンテクストにおけるボンヘッファーの歩みとの関連から研究が為されてきた⁽³⁾——が、本論文の主要課題は『服従』テキストに対する概念の探求となる。先の研究の方法には基本的な賛意を持つが、丁寧な概念研究を持ってしてそれは為されるべきであると考えからである⁽⁴⁾。

1. 『服従』における「ネガティヴな世」——研究史的回顧——

まずは先に述べた『服従』の〈世〉理解研究の現状での「一致点」について、研究史を振り返りつつ確認しておく。本稿がそこからの進展を図るところのネガティヴな世理解という『服従』の〈世〉解釈は、どのような論点から展開し、その実どのような内容を持ち、そこからどのような世への政治性が明かされたのか、ここに明らかにしたい。

『服従』の〈世〉をめぐる論争に関して、その端緒をひらいたのは H. ミュラー (Hansfried Müller, 1925-) であった。ミュラーは〈世〉とのネガティヴな関わりを主として展開する『服従』を現実からの逃避であると見なし、「誤った道」(Holzweg) であると否定的に評価した⁽⁵⁾。確かに、このように解釈が為される余地は『服従』テキス

↘ ように、世はしばしば対立的・分離的に理解されているからである。ましてや戦後ドイツのキリスト教会において〈世〉に対する教会の関わりはいよいよ緊急に問われていたのであるから (H. ツァールント著・新教セミナー訳『20世紀のプロテスタント神学』(上) 新教出版社、1975年)。

(3) 例えば R. シェトウルンク著、大島かおり訳「第10章 教会のための闘い——ディートリッヒ・ボンヘッファーの場合」『キリストへの信従』新教出版社、1984年、248-314頁。

(4) E. ファイルもまた丁寧な神学研究の必要を主張している。その作業によって、ボンヘッファーに対する安易かつ乱暴な解釈を解消していく必要を見出すからである。E. ファイル著、日本ボンヘッファー研究会訳『ボンヘッファーの神学 解釈学・キリスト論・この世理解』新教出版社、2003年、381、382頁参照。

(5) H. Müller, Von der Kirche zur Welt: Ein Beitrag zu der Beziehung des Wortes Gottes auf die societas in Dietrich Bonhoeffers theologischer Entwicklung. Hamburg: Herbert Reich Evg. Verlag, 1961. pp. 20, 37, 38, 197, 198, 199.

トにある。『服従』においてボンヘッファーは、世を罪と死の「罪悪の世」と強調しつつ、このようにさえ記している。

「破られることのない封印によって、世から引き離されて、聖徒たちの教会は最後の救いを待ち望む。見知らぬ土地に行く封印列車のごとく、教会は世を通って行く。ノアの箱舟が、洪水から救われるために、『その内と外をアスファルトで塗』らなければならなかったように（創世記6:14）、封印された教会の道は、洪水の中をゆく箱舟の航海に似ている」（276、三一九、傍点引用者）⁽⁶⁾。

『服従』の中で、世を通り行く教会は、しかし世との接点などまるでないかのように描かれるのである。これをミュラーが現実（世）からの逃避と見なし、批判したことは——後の研究者たちによって明らかにされるように結果的に誤っていたとはいえ——理解できないものではない。

このミュラーの見解を端緒とし、多くの研究・見解が批判的に提出された。E. ベートゲ（Eberhard Bethge, 1909–2000）は、ミュラーの理解に対峙し、『服従』の思想が暗に「1933年以降の世界」を批判的对象として想定していると分析し⁽⁷⁾、その上で「[イエスを中心にした] ゲッターのような性格を持つことが、どのような時にもまして不可避の時になされた」のであり、それが「教会の主題になったのは正しかった」とコメントする⁽⁸⁾。当時の歴史的コンテクストに『服従』を置くと、世を「罪悪の世」と強調し、教会ないしキリスト者がそこから乖離するところの「ネガティブな世理解」（『服従』の世理解）は、当時のナチの世に対する「否」であることが分かるのであり、それが世とは無関係の思索でないことが見出されるのである。

ベートゲに並び E. ファイル（Ernst Feil, 1932–）は、ボンヘッファーの全体的な思想展開の解明を目指すべく、『服従』の〈世〉の概念研究を包括的・網羅的に展開した。『服従』全体において〈世〉は基本的に罪と悪の「邪悪な世」⁽⁹⁾として何より描かれるとファイルは指摘し、そのような意味での世は『服従』においてキリスト者ない

(6) 引用後の括弧に記されるアラビア数字は新版ボンヘッファー全集4（DBW 4）の該当頁を、漢数字はボンヘッファー選集『キリストに従う』のそれを指す。Nachfolge（DBW 4），München: Chr. Kaiser, 1989. 森平太訳『キリストに従う』（ボンヘッファー選集3）、新教出版社、1966年。

(7) E. ベートゲ著・雨宮栄一訳『ボンヘッファー伝』（第3巻）、新教出版社、1974年、73–74頁。この見解は必ずしも詳細な論証を展開したものではないが、ボンヘッファーを誰よりも身近に知るベートゲゆえの炯眼な分析と言うべきものである。このベートゲの解釈は後に取り上げるペーターズらの研究によって補強される。

(8) 前掲書、74頁。『服従』において表現されるネガティブな〈世〉は、「[1933年以降の世界への] 闘いへの呼びかけであり、集中であり、また自己限定であり、そのことにより限界のない福音が今一度、一人領域を得るためのもの」であったと積極的に理解するのである。

(9) DBW 4, pp. 138, 163, 269. 邦訳では147、179、310頁等を参照。

D・ボンヘッファーにおける〈世〉の理解（橋本）

し教会との関係を分離と対立に結んでいることを改めて明らかにした。そして、この意味でファイルは『服従』の〈世〉理解を総じて一面的にネガティブ（negativ）であると称したのであった⁽¹⁰⁾。内容理解のため、代表されるボンヘッファーのテキストも引いておこう。

「神と世、神と財貨は相反する。…世を愛するならば、あなたは神を憎み、神を愛するならば、あなたは世を憎む」（170、一八九、傍点引用者）——『服従』に記されるこのボンヘッファーの言葉には、世との徹底的な対立理解が見出される。あるいは『服従』にこのようにある。「世の所与の現実に対する直接性は、仲保者にして主であるキリストが間に入って来られたゆえに、わたしから奪い去られる。洗礼を受けた者は、もはや世に属さず、世に仕えず、世に屈従することはない。彼はただキリストに属し、ただキリストを通して、世と関わるのである。世との断絶は完全なものである」（221-222、二五四、傍点引用者）——ここには世との徹底的な断絶の理解が確かに見出せる。これらに類する言葉は『服従』において枚挙に暇がない⁽¹¹⁾。

そして、この〈世〉に関するファイルの研究に反発するように、『服従』の〈世〉理解の政治性ないし世（現実）への志向性を究明する研究が——ファイルへの反発でありながらファイルの見解（『服従』の〈世〉理解はネガティブである）には基本的に依拠しつつ——起こった。それはミュラーの理解（ネガティブな世理解を展開する『服従』は、現実の世からの逃避、誤った道である）への批判であり、ベートゲの理解（世との対立・断絶を強調する理解は、当時の状況からみて正当である）の補強を意味した。カトリックの政治神学者 T. R. ペータース（Tiemo Rainer Peters, 1938-）、ヴュルテンベルクの牧師研修所主任教官 R. シュトゥルンク（Reiner Strunk, 1941-）などがその代表である。彼らの研究によっては、主として『服従』の〈世〉理解の持っている歴史的状況に対する応答的性格が明らかにされた。

例えばシュトゥルンクの研究（1981）は、ファイルに従って『服従』の〈世〉がネガティブな理解であるとしながらも、『服従』の〈世〉理解をさらに進んでこのように解釈する。

『服従』の〈世〉は一般的概念でも中立的概念でもなく、「えりぬきの論争的概念」である。つまり、『服従』における〈世〉とは『服従』の歴史的コンテクストとして存在した「ともに体験され耐えしのばれたこの世の出来事」を意味する⁽¹²⁾——この

(10) E. ファイル著、日本ボンヘッファー研究会訳『ボンヘッファーの神学 解釈学・キリスト論・この世理解』新教出版社、2003年、248頁を参照。

(11) E. ファイル、前掲書、235-249頁を参照。その他の代表されるテキストが挙げられ、まとめられている。

(12) R. シュトゥルンク著、大島かおり訳『キリストへの信従』新教出版社、1984年、294、303頁。その他〈世〉の意味としては、「すべての現実を例外なく規定しようとしている、もろもろの事件、傾向、勢力、イデオロギー」、「全体主義的要求」などが考えられている。

ように、具体的かつ歴史的に解釈を為し、その意味でネガティブなく世を語り、
く世との対立・分離を謳う『服従』（ネガティブな世理解）を、教会に対するナチの
挑戦という 1930 年代半ばにおける歴史的状況に対する「根本的な神学的回答」⁽¹³⁾と
理解するのである。

ペータースはシュトゥルンクよりも積極的に『服従』の世の政治性を強調して理解
する。即ちペータースに拠れば、「『服従』において支配的なネガティブな世の理解
は、1932 年以降、ボンヘッファーが追求してきた世という主題の矮小化として理解
されるべきではなく、むしろその時代批判的先鋭化、急進化と理解すべきなのであ
る」⁽¹⁴⁾。『服従』において深まるネガティブなく世理解を時代批判的先鋭化・急進
化として読み出すのである。

日本からは主として政治学の立場から宮田光雄（1928-）、近年では山崎和明
（1953-）がこのベートゲ-ファイル-シュトゥルンクの線上に立っている。山崎な
どはとりわけ明瞭にシュトゥルンクらと同じくファイルに倣って『服従』の世を「ネ
ガティブな世理解」と総括しつつ、それを当時の歴史的コンテクストに照らして理解
することにより、『服従』のく世の政治的意味合い——ナチの世に対するノンコン
フォーミズム、非同調主義——を明らかにしたのであった⁽¹⁵⁾。

果たして、『服従』のく世理解に関する議論の変遷はこのようにまとめられる。
ミュラーの解釈を端緒に展開した『服従』のく世の研究は、ベートゲのコメントを
機軸に、ファイルの「ネガティブ」という全体的な総括を経て、シュトゥルンク以降
の研究者の努力によってその政治性を明らかにされた。すなわち『服従』において、
世は何よりも罪惡の世として強調され、教会との関係から見てもそれは分離ないし対
立するものとされており、そのような理解は研究者らによって「ネガティブ (nega-

(13) 前掲書、289 頁。

(14) Timeo Rainer Peters, Die Präsenz des Politischen in der Theologie Dietrich Bonhoeffers : Eine historische Untersuchung in systematischer Absicht (=Gesellschaft und Theologie, Syst. Beiträge 18), München : Chr. Kaiser, 1976, p. 57.

(15) 宮田光雄『ボンヘッファーを読む』岩波書店、1995 年。77-113 頁。その中でも本稿の理解に関してはとりわけ 86、109-110 頁を参照。山崎和明『ボンヘッファーの政治思想』新教出版社、2003 年。103-163 頁。本稿の理解に関してはとりわけ 110、111-115、120-121、125-129 頁などを参照。宮田は『服従』を歴史的コンテクストに照らして分析することによって、『服従』の「この世からの後退」の思想をノンコンフォーミズムの機能を果たしたものとして解釈すると共に、『服従』におけるく世との連帯の思想を強調することから、後期ボンヘッファーのく世理解との連続性を指示している。山崎もまた宮田と同じく、『服従』のノンコンフォーミズムとしての意味を読み取り、後期ボンヘッファーにもネガティブなく世が存在するとの理解から、『服従』のボンヘッファーと後期ボンヘッファーとの連続性を指示している。また補足になるが、『服従』のく世に関する議論に際して、山崎が「ボンヘッファーが用いたこの世概念の内包が、それぞれの時期によって異なっている」(116 頁)と注意を促がしている点は重要である。ファイルに代表されるく世研究においては、く世の内容は同一のものとして理解されてきた向きがあり、それゆえに生涯にわたるく世の変遷を統一的に理解することが困難とされてきたと考えられるからである。尚、『服従』の世に関する研究については山崎の論文に多くを教えられた。感謝を持って記しておきたい。

D・ボンヘッファーにおける〈世〉の理解（橋本）

tiv) な理解」として総括された。そして、その『服従』の世理解の否定的調子の強さは、当時のナチズムに代表される世に対する神学的ないし政治的「否」であったことが明らかにされてきたのである。

2. 『服従』第Ⅱ部における〈世〉の理解——その概念にかかる思想——

本稿の課題とする概念の問題に限定して言えば、今日に至るまでの研究は、『服従』における〈世〉をネガティブな世理解と総括した。『服従』における〈世〉は、その思想的内容から言えば何より「罪悪の世」であり、教会ないしキリスト者との関係から言えば何よりも分離と対立に強調が置かれていると解されたからである。しかし冒頭でも述べたとおり、研究史の段階が別の課題を担っていたがゆえに、また『服従』の政治性とその評価を何より課題とする時期であったゆえに——いずれにしても〈世〉概念の解明は二次的な位置にありそれ自体が研究の第一の課題ではなかったゆえに、〈世〉概念それ自体の究明という意味では必ずしも十分ではない。以下、『服従』第Ⅱ部をテキストとし、そこに散在する〈世〉の理解をここに再構成してみたい。『服従』に関してはこれまで第Ⅰ部が研究の主要課題とされ、第Ⅱ部に関してはそのどこか雑然とした印象のあるゆえか、研究上あまり関心が払われず、取り上げられてこなかったが、ここにこそ「ネガティブ」との総称を破る理解が明瞭に示されているように思われるのである。

『服従』第Ⅱ部において、ボンヘッファーが繰り返し取り上げる〈世〉は、やはりえてして神の義を頑なに拒み、偶像と不品行と貪欲の支配する世であり、その意味で「罪悪の世」、「罪と死の世」と強調される⁽¹⁶⁾。

しかし、〈世〉はそのような世でありながら、そもそもは「キリストの所有地」であり、さらにはキリストの受肉・受難・復活の出来事に拠って、既に決定的に克服され、今や「崩壊の機を熟している」⁽¹⁷⁾。世の歴史に送りつづけられる絶え間ない神の言葉を、それでも退け、否むばかりでしかなかった人類全体・世に、神はイエス・キリストを送られた⁽¹⁸⁾——このことから、神を否み、貪欲に満ちる罪悪と死の世の終りが意味せられる。キリストは、「全ての世の罪をからだを持って担い給」い、「キリストが担い給うたものすべては、キリストと共に死ぬ」⁽¹⁹⁾。そのゆえに、罪悪と死の

(16) DBW 4, pp. 241, 273, 279–282, 297–298, 300. 邦訳文献 (1966)、278、315、323–326、347–348、350 頁。このことは〈世〉という概念が、繰り返し「罪」「律法」「肉」といった概念と関係付けられ、並列・類比的に指示されていることから理解される。DBW 4, pp. 244, 252, 274, 276–277, 278, 282, 290, 291, 317, 319, 322, 336. 邦訳文献 (1966) では、282、291、317、319、322、336 頁などを参照。

(17) DBW 4, pp. 241, 255. 邦訳文献 (1966)、278、294 頁。

(18) DBW 4, pp. 227–228, 243–244. 邦訳文献 (1966)、262–263、281–282 頁を参照。

(19) DBW 4, pp. 229, 244. 邦訳文献 (1966)、282、265 頁。

世は根底から覆されており、「世と罪は…十字架につけられて死にわたされ、罪の王としての力は既に破壊されたのである」(279、三二二)⁽²⁰⁾。

罪悪と死の世は根底から覆されている——そう力強く宣言するボンヘッファーは、ではなぜ『服従』において、分離し対立すべき悪しき死の世に多く叙述の焦点をなお定めるのであろうか。世を見る彼の眼差しは錯綜し、その理解は矛盾しているのであろうか。決してそうではない。ボンヘッファーは、キリストによって決定的に克服されつつも、教会が担うよう遺された世に、その眼をいよいよ傾けているのである。

未だ、世は確かに克服などされていないかに見える。キリストによって決定的に覆されたはずの世は、いまもって神を拒み、「自らの病的欲求」を自身で神に仕立てあげている⁽²¹⁾。目に映るのは偶像崇拜に満ち、不品行と悪徳の支配する世であり、そのような意味で罪悪の世・罪と死の世であるばかりである⁽²²⁾。いわんやキリストに与り、罪悪の世を過去のものとする教会においてさえ、世の誘惑が入り込むのは目の当たりにされるし、教会がキリストにこそ与って世に対峙し、世の終り・その無常性と相対性を証するがゆえに、教会は世から拒まれ、終には暴力を持って介入されるのであるから⁽²³⁾、世は克服などされていないかに見える。

このキリストによる克服の現実性を否定するかの状況に、しかし、ボンヘッファーはこのように続ける。

「イエス・キリストが贖罪と代理の苦難をすべて成就し給うたにもかかわらず、この地上におけるキリストの苦難はまだ終わっていない。キリストはその恵みのうちに、再臨に至るこの最後の時のために、さらに成就せられるべき苦難の残り…を教会に遺し給うたのである」(236、二七四)。

キリストの教会は、神を否む悪徳の世の侵入を、自らのうちに生じさせている。あるいは、キリストを証しする道を歩むばかりに、自らを神と立てる死の世の外的な侵害を受ける。キリストの教会は、今なお確かに悪しき世からの苦しみを受けること必至の道を歩んでいる。そしてそこでは、キリスト者の内なる、あるいは外なる悪しき世の力にこそ現実性は看取され、キリストの力の現実性は疑われるばかりともなり得よう。しかし、そのような悪しき世の力の前に打たれる教会の状況に、ボンヘッファーはなおキリストの現実性にこそ信頼を見出し、悪しき世が既に克服されているとい

(20) その他、DBW 4, p. 254. 邦訳文献 (1966)、293 頁。

(21) DBW 4, p. 282. 邦訳文献 (1966)、325 頁。

(22) 既に山崎和明が、『服従』の〈世〉を「偶像の世界」、「墮落した世界と人間」と見なす解釈を提出している。山崎和明『ボンヘッファーの政治思想』新教出版社、2003年、126頁。

(23) DBW 4, p. 262. 邦訳文献 (1966)、302 頁を参照。

D・ボンヘッファーにおける〈世〉の理解（橋本）

うこと、そして未だ残る世の力は影でしかなく、現今、世から受ける教会の苦難はキリストから教会に託された苦難の残りであることを語るなのである。教会がキリストを証しすることを通して、遺されたキリストの苦難を自ら担い、「キリストのからだのえだとして苦しむ」その時にこそ、世ではなく、キリストの現実性こそが証しせられ、「世の崩壊の機は熟している」⁽²⁴⁾。このような意味で、「罪悪の世は、教会にとって過去のもの」(282、三二六)でしかもはやありえない。

ボンヘッファーは〈世〉を罪と悪の満ちる世としつつも、キリストのゆえに既に決定的に克服された、しかし未だなお教会が担うべきその影と苦難を遺す世として見出しているのである。

3. 『服従』第Ⅱ部における〈世〉の理解——その概念における関係——

『服従』第Ⅱ部における世概念について、その思想的内容は顧みられた。では、果たしてこれまでの研究史の大きな焦点の一つであった世概念にかかる関係という観点から言えば——例えば、ファイルは分離と断絶という関係を『服従』の〈世〉理解に見出していた——どのように言えるのであろうか。ここでも『服従』第Ⅱ部をテキストとし、そこにおける教会と〈世〉との関係という観点から追求してみよう。

『服従』第Ⅱ部において〈世〉理解がまさに根本的にはキリスト理解を基底としていたように、教会の実存もキリスト理解によって規定されており、それは教会の〈世〉をめぐる関わりについてもあてはまる。つまり、キリストの世をめぐる実存が、キリスト教会の世についての実存を規定する。キリストの「われわれのため」の究極的な自己贈与は、その真実に与ることを許されたキリスト者・教会の実存を究極的に「キリストのため」へと方向付けるのであり、ゆえにキリストに与る教会の実存は、キリストを内容・基礎・目標として志向することを得るのである。このことをさらにボンヘッファーは文字通り生きた言葉でもってこのように表現する。「イエス・キリストに自らを全く捧げるものは、キリストのかたちを身に負うであろうし、また負わねばならない」(297、三四六)。キリストの生きられたかたちが、キリスト者の生において生きられることにおいて、キリストは今も真に世において生きておられるのである⁽²⁵⁾。

(24) DBW 4, pp. 255, 262–263. 邦訳文献 (1966)、294、303、321 頁。

(25) 更に、『服従』第Ⅱ部において、このように言われている。「イエス・キリストは自らのからだ、すなわち教会のかたちをとってイエス・キリストご自身であり、同時にキリストの教会であり給う」(231、二六八)。「聖霊降臨以来、イエス・キリストは、ご自身のからだ、すなわち教会のかたちをとってこの地上に生き給う。地上にこそ、イエスのからだ、すなわち十字架にかかり・よみがえり給うたからだがある」(232、二六八)。「教会における信ずるものの生は、彼らの中においてイエス・キリストが真実に生き給うことである」(235、二七二)。「イエス・キリストのかたちが、その」

では、教会が同じかたちを負い、生きることを許され、また負い、生きねばならないキリストの実存とは、世との関わりにおいてどのようなものであろうか。ボンヘッファーは〈世〉との関わりにおけるキリストの実存をこのように述べている。

キリストは「世に[・]来[・]たり[・]給[・]う[・]て、限りない憐れみにおいて人間を担い、受け入れ、しかも世に[・]同[・]調[・]し[・]ない[・]で、世から捨てられ、追放され給うたキリストご自身のかたちなのである。キリストは、世からのものではあり給わなかつた。世との正しい出会いにおいてこそ…教会は、苦難の主のかたちに絶えず似るようになるであろう」(263、三〇四、傍点引用者)。

このキリスト理解に導かれて、ボンヘッファーは教会の世に対する関係を以下のように示しだす。

第1に、世から[・]隔[・]離[・]する (in Absonderung von der Welt) 教会という理解である。世からのものではあり給わないキリストの自己贈与によってキリストの所有とされ、キリストをこそ主とし、キリストに全き固着を為すキリストの教会は、もはや偶像を立て、放縦の支配する罪と悪の世から切り離される。「キリスト者とキリストのからだの交わりが緊密であるがゆえに、キリスト者はキリストのからだに属すると同時に世に属することはできない」(281、三二四)。ここに、教会は「破られることのない封印」を持って世から分かれたれ、キリストのうちに閉じ込められる⁽²⁶⁾。このゆえにキリストの現実性に生きる教会は、世に属すことも、仕えることも、屈従することもなく、教会と世の間には決定的な「断絶」、「隔離」が生起せられるのである⁽²⁷⁾。

そして、この第1の規定から以降の規定が生じ得る。世ではなく、ただキリストを主とし、キリストに固着する教会は——キリストの側に立ち、世から[・]離[・]別[・]する[・]教[・]会[・]は、キリストの実存を着て、新しい世との関わりに生きることを許されるのである⁽²⁸⁾。

第2に、キリストが世に (in) 来たりて身を置き、そこでこそ人間を受け入れたという理解から、世における教会の姿が必然的に示される。キリストは世を厭うことなく「世のまっただ中に」身を置かれたし、今なお世において「自らの占めるべき場所」を要求されている⁽²⁹⁾。死と復活、昇天の後もキリストは世において生きておられ、人間のうちにかたちを取り、そこにおいて生きることを求められている⁽³⁰⁾。ゆ

↘ 服従する者の中に迫り入り、彼を満たし、彼のかたちを作り変えて、弟子が師に似るようになるばかりか、まったく同じになる」(297、三四六)。「イエス・キリストに自らをまったく捧げる者は、キリストのかたちを身に負うであろうし、また負わねばならない」(297、三四六—三四七)。

(26) DBW 4, pp. 276, 270. 邦訳文献 (1966)、319、321 頁を参照。

(27) DBW 4, pp. 221, 277. 邦訳文献 (1966)、254、320 頁を参照。

(28) DBW 4, p. 233. 邦訳文献 (1966)、269—270 頁を参照。

(29) DBW 4, pp. 241, 247—248, 300. 邦訳文献 (1966)、278、286、350 頁を参照。

(30) DBW 4, pp. 244, 303. 邦訳文献 (1966)、282、354 頁を参照。

D・ボンヘッファーにおける〈世〉の理解（橋本）

えにキリストの教会はキリストの場所占有に応え、世のまっただ中で「世の内側における召命生活」を生きるし、生きねばならない⁽³¹⁾。むしろ世に身を置かれたキリストの教会には世から隠遁することは許されていない⁽³²⁾。既に見られたように、キリストの自己贈与によってキリストに与ることを許された者は世から切り離れることを意味された。しかし、同じキリストによって世において新しく生きることへと彼・彼女は招かれる。神に反し、自らの欲望に支配され生きる世の在り方から切られ、解放されてこそ、キリスト者は世を無価値なものとしてしまうことはありえない。

第3に、キリストが自らの苦難において限りない憐れみにおいて人間を担い、受け入れたという理解は、そのうちにキリストが「われわれのために」存在し給い、いわんや全人類のために（für）生き給われたことを意味しており、そこからは教会がキリスト者の兄弟姉妹を志向するばかりではなく、全人類を志向するという、世のための教会とも称し得る理解が開かれる。キリストは「われわれのために」その歩みを置かれたが、同時にそれは「人間である全ての者のために」でもあった⁽³³⁾。神の憐れみは、キリストにおいて、全人類を自ら引き受け、担い給う。すなわちキリスト者である「われわれは全人類と共に受け入れられた」（228、二六三）。だから、キリストの教会は洗礼を受けた兄弟姉妹に対する愛の奉仕、憐れみの奉仕を為すばかりではなく⁽³⁴⁾、全ての人間の兄弟姉妹として「人間と呼ばれるすべての者に対するキリスト者の兄弟愛」を生きるようにせられ、また生きねばならない（301、三五二）。キリスト者は世から切り離され、そして次に見られるように世に対峙しさえする。しかし、その世と乖離し、対峙する教会の実存の内容には、キリストにあって全人類のために生きるようにされるといふ世のための志向さえ包含されるのである。神に反し、自らを神と奉るばかりの世から切り離され、キリストをこそ証することによって世と対峙しさえするキリスト者は、同時に、世のために苦難さえ負う者にされるのである。

第4に、キリストが世に同調しないで、世から捨てられ、追放され給うたという理解からは、世と対峙する（gegen）教会の姿が生じせられる。神を否み、悪徳に生きる罪悪の世からのものではあり給わないキリストは、世において、「世に同調しない

(31) DBW 4, pp. 245, 260, 266. 邦訳文献（1966）、283、300、307頁に該当。

(32) DBW 4, pp. 260. 邦訳文献（1966）、300頁。

(33) DBW 4, pp. 228, 235, 301. 邦訳文献（1966）、273、351、263頁。

(34) DBW 4, pp. 252–253. 邦訳文献（1966）、291–292頁。このことは『服従』第II部において、例えばこのように言われている。「兄弟のあるところにキリストご自身のからだがある」（252、二九一）。「世がキリスト者の兄弟を軽蔑するならば、その兄弟をキリスト者は愛し、また彼に仕えるだろう。世が兄弟に暴力をふるうなら、キリスト者は助け慰めるであろう。世が兄弟の名誉を奪い、辱しめるならば、キリスト者はその兄弟の汚名を払うために自らの名誉を与えるであろう。…世が偽りに身を隠すならば、キリスト者は沈黙する人々のために語り、真理のために証しをするであろう。それがユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由人であろうと、強い者であろうと弱い者であろうと、高貴の人であろうと卑賤の人であろうと…」（252–253、二九一–二九二）。

で」、それがために世から苦しみを受け、捨てられた⁽³⁵⁾。たとい神の国を証することが世から憎まれ、呪われ、罪とされることを意味しても、その歩みを最後までまっとうされた⁽³⁶⁾。このキリストとの交わりにおいて生きるキリスト教会は、イエスの弟子たちがキリストを証言することにおいて、世に対して立ち、世から苦難を受けねばならなかったように、世における苦難の中で「世に対抗する教会」であり、時に「世に対する攻撃」さえ提出するのである⁽³⁷⁾。

ここで、『服従』第Ⅱ部における〈世〉概念にかかる関係に関して言えば、このようにまとめられる。それは、キリストにこそ固着するゆえに世と離れてというばかりではない、その一点からはキリストにあつてまさしく弁証法的に、キリストと共に世において、キリストに倣いて世のために、キリストの如く世に対してとの関わりまで開かれているのである。

おわりに

以上の研究から、『服従』（第Ⅱ部）の〈世〉の理解が、本稿の1. で確認されたこれまでの見解においては汲み尽くし難い内容をもっているということは明らかであろう。

『服従』第Ⅱ部における〈世〉の理解は、言わば教会にとっての世として、キリストの所与の出来事の下に神学的に把握されており、それは神に反し、自らを神と立てては放縦に走るばかりの悪徳と罪悪の世でありながら、しかしキリストによって既に決定的に克服された世であつて、「今日の」教会が目の当たりにし、直面する問題としての〈世〉は、言わば未だ遺された悪徳と罪悪の世の影とも言うべきものであつた。そして、さらにそれは、教会に対峙しつつも、キリストから教会に遺された課題でさえあつたのである。世にかかる関係という点から言えば、世は教会と切り離される、あるいは対抗し合う罪悪の世でありながら、しかし、それがキリストによって受け入れられ、克服され、いまだなお担われ続けているがゆえに、教会はそこにおいて、そのために歩むものとも理解されていたのであつた。ファイルが追求してきたボンヘッファーにおける〈世〉理解の全体的な変遷の観点（ボンヘッファーにおける連続性・非連続性の問題）から見れば、このように言える。本研究は、「1932年に展開するも、『服従』の時期には中断され、そして『倫理』に至って再び花開き、定着・深化した」（傍点は引用者による）⁽³⁸⁾とこれまで言われていた弁証法的〈世〉理解の

(35) DBW 4, pp. 263, 273. 邦訳文献 (1966)、304、315頁。

(36) DBW 4, pp. 228, 228-229. 邦訳文献 (1966)、263、264頁。

(37) DBW 4, pp. 242, 260, 277. 邦訳文献 (1966)、279、300、320頁。

D・ボンヘッファーにおける〈世〉の理解（橋本）

萌芽が、既に『服従』第Ⅱ部においてあることを見出したのである。

確かにまだ『服従』第Ⅱ部では、『倫理』のような現実の具体的な倫理問題への深まりは見出されない。しかし、『倫理』に展開される〈世〉への開かれた道程は、既に『服従』における世理解、とりわけ世概念にかかる関係の「全人類のための」キリスト——教会理解に予感、見通される。詳細には今後の課題であるが、悪しき世に呑み込まれんばかりの時代状況の中で、そのような世への距離と対立の姿勢を保ちつつ、しかし決して世を捨象することも、絶望に落ちることもせず、深まる参与へと歩みゆくボンヘッファーの姿勢が、『服従』第Ⅱ部における彼の〈世〉概念から既に神学的に眺望されるのである。

本稿の研究からはその他にもいくつかの課題が新たに見出される。本稿が見出した、『服従』研究で丁寧には取り扱われてこなかった世理解の他方の側面（世における、世のための）の内容解明は未だ充分ではないし、世理解の終末理解との関わりも課題として残された。『服従』全体における『服従』第Ⅱ部の位置の問題、あるいは当時の歴史的コンテクストに「ネガティブな世」というのではなく、ここに明らかにされた世理解を照らしたなら何が見出されるかという点も気にかかる。先ほども述べた「ネガティブ」とするに留まらない『服従』の世理解が後期思想や初期思想とどのような関連・展開を意味するのかという問題もある。『服従』の世＝「ネガティブ」とし、『倫理』の世＝ポジティブあるいは弁証法的理解とする解釈から、世理解に関しては両書に「断絶」があるとされ⁽³⁹⁾、ボンヘッファーの連続的發展を論証するためにキリスト論的集中の一貫性やボンヘッファーの歩みの連続性がこれまで指摘されてきたが、本稿はポジティブーネガティブを内包する弁証法的な〈世〉理解の端緒が既に『服従』（第Ⅱ部）にあることを——もちろんボンヘッファーらしい即応性を持って強調して語られる点が異なるにしても——ここに確認するのであるから。

(38) E. ファイル著、日本ボンヘッファー研究会訳『ボンヘッファーの神学 解釈学・キリスト論・この世理解』新教出版社、2003年、212-276頁参照。要点は212、213、227、235-237、248-249、252、253、257頁。

(39) E. ファイル著、山崎和明訳『D・ボンヘッファーの政治思想』新教出版社、2003年、235-252頁、特に251、252頁参照。誤解のないように言っておくが、ファイルは決してボンヘッファーに思想的な断絶を認めているのではない。彼の大作は言わばボンヘッファーの連続的發展の証明のために捧げられているのだし、指定頁を参照して頂ければ分かる通り、その基調をキリスト論に見出している。